

能『景清』に見られる感情表現の副詞

— その英訳と文化的考察 —

Emotive Adverbs and Cultures:
Reflections on English Translations of the Noh Play *Kagekiyo*

宮 田 修 (Miyata, Osamu)

Japanese Noh has preserved its original form for about 600 years without being influenced by Western civilization. We are astonished to find in the Noh play *Kagekiyo* the equivalents of the modern emotive adverbs *isso*, *sasugani* and *doose*. Therefore, it may be significant to examine not only whether the classical equivalents *totemonokotoni*, *sasugani*, and *totemo* are used to indicate abrupt logical leaps and express the speakers' profound emotions in *Kagekiyo* in similar ways as *isso*, *sasugani*, and *doose* are used in modern Japanese, but also whether the English translations of the play convey the suggestive meanings of these adverbs and reflect the dramatic intensity of the original play.

1. はじめに

日本人が、日頃何気なく用いている言葉の中に、「どうせ」「いっそ」「なまじ」「さすがに(さすが)」「せめて」「やっぱり(やはり)」など、意味が非常に曖昧ではあるが、その場の雰囲気や前後関係で日本人の感情を見事に表現する一連の副詞がある。これらの副詞は、突然の論理的飛躍によって話し手のおかれた微妙な立場や心情を表現し、読者や聞き手の深い共感を呼ぶ働きがある。

たとえば、「いっそ」の場合、板坂元の言葉を借りれば、「考えがジレンマにおちいった時、その不快感焦燥感をきらって思考を中断放棄し、それまでの思考から飛躍した結論に感情的直感的に達する考え方」を表わす¹⁾。愛知県の高校生が大学受験で志望校を決めかねている場合を想定してみよう。早稲田大学が一番行きたい大学だが、学費が高く、また東京での生活では生活費がかかりすぎる。かと言って名古屋大学では親元から離れたたいという願いが満たされない。そこで、あれやこれや考えたあげく、「いっそ、アメリカの大学にしようかな。」のように、それまでの考えの道筋を一足飛びに飛び越して、突然の飛躍をするのである。この結論を聞いた友人は、突然の飛躍に驚きながらも、大学の選択で悩み抜いた男が、もう考えることが嫌になって、論理的思考に固執せず、それまで予想もしなかった新しい考えにパッと飛びついたことを歓迎し、理屈だけにとらわれない気持ちのよい男という高い評価をくださるのである。

また、「さすがに」の場合、『広辞林』(1973)は、「そうはいうものの」の意味とともに、「が

んこおやじでも、さすがにこどもには甘い」という例文を掲載している。この例文中の「さすがに」は、その親父の頑固さが周知の事実であり、並外れたものであることを示し、同時にその頑固さからは考えられないほど、世間の父親同様子供に甘いことを強調する。「頑固さ」と「甘さ」という矛盾する概念が「さすがに」によって結びつけられ、聞く人の心に温かい人というイメージを与えるところにこの言葉の特色がある。「どうせ」は、それまでの思考が中断されて突然否定的な結論に達し、あとは運命に身を任せるといった諦めの感情を表現する。「いっそアメリカの大学にしようかな」と言ってみたものの、突然感情の変化がおり「でもどうせ無理だろう。アメリカの大学は英語が難しいし、親だって許してくれないだろうし」のように、人生に対する絶望的な評価をし、あとは運命に身を任せるといった心境を表現する。ところが、聞いている友人には、実力があるのにもかかわらず、運を天に任せる謙虚な男という印象を与え、好感をもたれるのである。

「能」は、明治時代からの欧米文化の影響を受けることなく、およそ600年前の様式と言葉をほぼその当時のまま保ち続けている。すなわち欧米の思考様式や欧米文学を翻訳するために作られた日本語を取り入れず、純粋に日本人の論理と価値観に裏打ちされた言葉使いを残しているわけである。驚くことに、能『景清』²⁾の謡曲本を見ると、前掲の「さすがに」がそのまま用いられ、「いっそ」「どうせ」はそれぞれ「とてものことに」「とても」の形で用いられている。『景清』に見られるこれらの「とてものことに」「さすがに」「とても」は現代語の「いっそ」「さすがに」「どうせ」と同様の論理と価値観で用いられているのであろうか。また、『景清』の英訳はこれらの言葉の意味合いを正しく伝え、能『景清』の演劇的效果を十分に引き出す翻訳となっているのであろうか。

本論文の目的は、二つの言語、すなわち能『景清』と、その英訳の文体を対照言語学の観点から比較分析し、その文体の違いを生み出す文化的背景を考察するものである。さらに、「とてものことに」「さすがに」「とても」の暗示的意味をできるかぎり再生する翻訳を試みるものである。この目的のために、能『景清』原典³⁾と二種類の英訳(Pound-Fenollosa, Waley)⁴⁾を、文化、演劇、文体、言語の観点から比較分析するものである。

2. 能『景清』に用いられている感情表現の副詞

2.1 とてものことに

勇猛な平家の侍悪七兵衛景清の将来は約束されていたが、平家が源氏に負けることにより、人生が一変してしまう。現在の景清は、日向の国宮崎に流され粗末な庵室に住む、一介の盲目の老人である。景清は自らを日向の勾当⁵⁾と呼び時折平家の物語を吟じてわずかの収入を得ているが、里人の差し出す食べ物と衣服によってかろうじて生き存えている。

能が始まると景清の娘人丸(ツレ)と従者(トモ)が登場し、景清を尋ね宮崎へ向かう旨を述べる。このとき景清は庵室の中でわが身の不幸を嘆き呟吟している。やがて庵室にたどり着いた二人は、中から声が聞こえるのでその声に向かって景清の行方を尋ねるが、景清は娘と知りつつ自分の素性を明かさない。二人は仕方なく庵室を後にし、途中で一人の里人(ワキ)に会う。

その里人は庵室の主が二人の尋ねる景清であることを教える。それを聞いた従者は里人に次のように話す。

従者 (問答)

これハ景清の息女にて渡り候が。今一度父御に御対面ありたき由仰せられ候ひて。
 これまで遙々御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられ候ひて。景清
 に引き合はせ申されて賜はり候へ。

このように、従者は景清の娘人丸が宮崎へはるばるやって来た理由を説明するが、そのとき従者は、ひとえに父親に会いたいがために、鎌倉からの長い道のりを雨風霜露に耐えてきた人丸の苦勞を思い起こす。一瞬従者の頭の中を次の考えがよぎる。「このまま急ぎ戻っても、恐らく景清は会ってはくれまい。それよりも、この里人に頼んで景清の庵室まで一緒に行ってもらい、娘の人丸がとても会いたがっている様子を話してもらえば、景清は会ってくれるかもしれない。」そういう思いに頭が一杯になった従者は、いきなり、前述の「これまで遙々御下向にて候」とは全く論理的に繋がらない「とてもの事に」という副詞を用いて、従者にそれを頼んでしまうのである。再び板坂元の言葉を借りれば、「余りに人丸を思う気持ちに頭が飽和状態になって、思考を中断放棄し、それまでの思考から飛躍した結論に感情的直感的に達した」のである。故に、この「とてもの事に」の中に従者の思いが凝縮されているのである。この結論を聞く読者や観客は、従者の突然の飛躍に驚きながらも、あふれるばかりの思いに圧倒されて論理的思考ができず、それまで予想もしなかった思いがけない考えに飛びついた従者に感心し、理屈だけにとらわれない忠義に厚い従者として高い評価を下すのである。

このように考えてみると、この「とてもの事に」は、なぜそのように考えるのか一切理由を説明しないで、直情的に結論に達するあの現代日本語の「いっそ」と置き換えても何ら意味が変わらない。さて、この詞章はどのように英訳されているか、二つの翻訳を見てみよう。

ATTENDANT

She is the exile's daughter. She wanted to see her father once more,
 and so came hither to seek him. Will you take us to Kagekiyo?

(Pound-Fenollosa, 1959:108)

ATTENDANT

This lady is Kagekiyo's daughter. She has borne the toil of this journey
 because she longed to meet her father face to face. Please take her to him.

(Waley, 1976:93)

比較してみて分かるように、Pound-Fenollosa も Waley もともに、「とてもの事に然るべ

きやうに仰せられ候ひて」の部分をもまったく英訳していないのである。この部分の英訳を省略した理由は、恐らく、「とてものに」に導かれる一文がそれまでの従者の思考と論理的につながらず、突然の結論「景清に引き合はせ申されて賜はり候へ」へ飛んでしまっているためであろう。また、「とてものに」に凝縮されている従者の思いが理解できなかつたためでもであろう。英語に翻訳する場合、論理的繋がりが言葉でしっかりと表現されていることが最も大切なことなのであろう。さらに、「然るべきやうに仰せられ」も外国人にとっては意味曖昧な表現であろう。英訳の“Will you take us to Kagekiyo?” “Please take her to him”も能原典の「景清に引き合はせ申されて賜はり候へ」の意味を正しく伝えていない。「引き合わせる」という表現には、景清に娘の人丸に会ってくれと頼むところまで含まれているからである。

残念ながら Pound-Fenollosa と Waley の翻訳を読むかぎり、観客が聞いていて胸を打たれる従者の切羽つまった深い苦悩と思いは伝わってこない。

2.2 さすがに

里人は人丸と従者を庵室へ案内し、景清に声をかける。景清は忘れようと努力している自分の名前を里人に呼ばれたことに腹をたて、複雑な心境を吐露する。内心では現在置かれた惨めな境遇を悲しんでいるが、外には強がりを見せる。並みはずれた繊細な感覚を持ち、盲目でありながらすべての自然現象を心の目で知覚することができるのだと主張する。見えぬ目の奥に、孤独感をそそる松風の吹く様が浮かび、雪から花へと詩的イメージが広がる。歌人としての繊細な自己を誇らしく思い、自然の美を愛で、その美の失われる悲しみを暗示する。さらに、満潮となって荒磯に打ち寄せる波の音を聞き、屋島での合戦の様子を思い浮かべる。

突然、栄光の過去から惨めな現在の自分に戻り、琵琶法師としての境涯を認識する。景清の複雑な心境を地謡が代弁して次のように謡う。

地謡（段歌）

目こそ暗けれども。

人の思はく一言の内に知るものを。

山ハ松風。

すは雪よ

見ぬ花の覚むる夢の惜しさよ。

さて又浦ハ荒磯に寄する波も聞ゆるハ。

夕汐もさすやらん。

さすがに我も平家なり。

物語始めて御慰みを申さん。

上記の詞章の中で、副詞「さすがに」は、松風、雪、花とめぐり、最後の潮騒の音に喚起される精神的高揚と突然の現実認識の鋭い対比を強調する。「さすがに」は、景清の過去の栄光

が並みはずれたものであることを示し、同時に現在置かれている境遇がその対極にあることを強調する。「夕汐もさすやらん」で、勇猛な平家の侍であった過去の自分を恍惚のうちに思い起こすのであるが、突然「さすがに我も平家なり」で、「確かに自分は平家の勇猛な侍として平家一門から羨まれる存在であったが、今は盲目の平家語りにすぎないのだ」と現実認識を行なうのである。故に、「さすがに」の中には、景清の複雑な感情が一瞬のうちに凝縮され、「栄光」と「零落」という矛盾する概念が「さすがに」によって結びつけられることによって、現在置かれている景清の悲しみが強調され、観客の同情を引くのである。

地謡もこの突然の感情の変化を効果的に表現するために、「夕汐も」のところでテンポをゆるめ、次の「さすやらん」で、さらにテンポを緩め音程を下音に下げて、うっとりとして昔の栄光に思いを馳せる景清を表現するのである。一呼吸の「間」の後、地謡は次の「さすがに」で音程を突然上音に上げ、景清の感情の変化を強調する。

このように「さすがに」は、一瞬のうちに感情の変化を表現する重要な働きをするのだが、英訳では、この意味合いがうまく表現されているのだろうか。ここで、二つの英訳を比較してみよう。

CHORUS

Though my eyes are dark I understand the thoughts of another.
I understand at a word. The wind comes down from the pine trees
on the mountain, and snow comes down after the wind. The dream
tells of my glory. I am loath to wake from the dream. I hear the
waves running in the evening tide, as when I was with Heike. Shall
I act out the old ballad? (Pound-Fenollosa, 1959:109)

CHORUS

Though my eyes be darkened
Yet, no word spoken,
Men's thoughts I see,
Listen now to the wind
In the woods upon the hill:
Snow is coming, snow !
Oh bitterness to wake
From dreams of flowers unseen !
And on the shore,
Listen, the waves are lapping
Over rough stones to the cliff.
The evening tide is in.

I was one of them, of those Tairas. If you will listen, I will tell
you the tale ... (Waley, 1976:94-5)

次のように、「さすがに我も平家なり」に当たる部分を抜き出して比較してみると、原典との差がよく分かる。

Pound-Fenollosa:, as when I was with Heike.
Waley: I was one of them, of those Tairas.

この比較で明らかのように、英訳では「さすがに」の重要な一句が完全に省略されている。さらに、「我も平家なり」の解釈が違っている。二人とも、「今は、しがない平家語りの琵琶法師である」ではなく、「平家の待だった」の意味に翻訳しているが、これでは「さすがに」の意味が生きてくるわけがない⁶⁾。故に、「さすがに」の省略は、この副詞が、「過去の栄光」と「現在の惨めな境遇」の対比を効果的に行なうものであるという理解がなかったためであろう。「さすがに」は「盲いた目に栄華の夢のはかなく覚めるのを惜しんで昔物語を始めようとする」⁷⁾ 景清の心情をよく表わし、観客の共感を強く得る表現なのである。

2.3 とても

景清は気持ち落ち着くとともに、里人に激怒した短慮を詫び、親子の対面を果たす。親子の情愛を確かめ合ったのち、人丸は景清に屋島の合戦における景清の剛勇振りを語ってほしいと頼む。景清はすっかり平家武者の感覚に戻り、老いの身を駆り立て、情熱を振り絞って屋島合戦の武勇談を語る。語り終わるや、突然やせ老いさらばえた姿と乱れがちな言葉に恥じ入り、憂いに沈む。このあと自分の死後の回向を頼み、娘を郷里へ帰すのである。この景清の勇壮な軍語りのあとの心中を、地謡が次のようにほぼ7-5調のリズムで謡う。

地謡 (歌)

昔忘れぬ物語。
衰へ果て、心さへ。
乱れけるぞや恥かしや。
この世ハとても幾程の。
命のつらさ末近し。
はや立ち帰り亡き跡を。
弔ひ給へ盲目の。
暗き所の燈火
悪しき道橋と頼むべし。

詞章の3行目「乱れけるぞや恥ずかしや」のところで、景清は自分の醜い老体と言葉の乱れ

に恥じ入り、悄然として顔を伏せるのであるが、次の瞬間この現実認識からさらに自分の死期の近いことを悟り、強い厭世的気分に限る。軍語りの勇壮な気分から、一転して厭世的気分への感情の変化を示すのが、この副詞「とても」である。「この世は幾程の(命)」は、「この世での命は長くはない」の意味であるが、「とても」が挿入されることにより、「どんなに生きようと頑張ってみても」の意味が加えられ、人間の意思や力ではどうすることもできない運命の力を前面に出し、厭世観を強く表現するのである。景清は、老齢で体力も衰えた今、たとえ自分で望んだとしても、先が長くないことは十分分かっている。次の詩行「命のつらさ末近し」に表現されているように、むしろ、宮崎へ流されてからの孤独は耐え難いものであり、その苦しみがやがて終わることに喜びさえ見いだしているのである。あとは、娘に死後の回向を頼むだけであるという運命のなすがままに身を任せる心境を吐露する。決して積極的に生き抜き、活路を見いだそうという意欲は示さない。この詞章の最後のところで、最後に「親子の情にとり乱さぬ武人の態度を示そう」⁸⁾として、親子の情愛の絆を断ち切り、娘を郷里に帰すのである。

この「とても」によって表わされる憂いの感覚は日本人のとても好むものである。副詞「とても」を耳にすると、突然老盲孤独の景清を襲う無力感と悲愁を考え、観客は涙する。舞台を見ながら、景清の悲しみに自分の悲哀に満ちた生活を重ね合わせ、「やはり、人生はつらいものだ」と景清の運命に共感するのである。

この「とても」を含む前掲の詞章はどのように英訳されているだろうか。二種類の翻訳を見よう。

CHORUS

These were the deeds of old, but oh, to tell them ! to be telling them over now in his wretched condition. His life in the world is weary, he is near the end of his course. 'Go back,' he would say to his daughter. 'Pray for me when I am gone from the world, for I shall then count upon you as we count on a lamp in the darkness ... we who are blind.'

(Pound-Fenollosa, 1959:111)

CHORUS

I am old: I have forgotten — things unforgettable !
My thoughts are tangled: I am ashamed.
But little longer shall this world,
This sorrowful world torment me.
The end is near: go to your home;
Pray for my soul departed, child, candle to my darkness,

Bridge to salvation !

(Waley, 1976:99)

詩行のうち「とても」を含む2行を抜き出して英訳と並べてみると、以下の通りである。

この世ハとても幾程の。

命のつらさ末近し。

Pound-Fenollosa:

His life in the world is
weary, he is near the end of his course.

Waley:

But little longer shall this world,
This sorrowful world torment me.
The end is near:

英訳二例ともに、「命のつらさ末近し」のほうに焦点をあてて英訳し、肝心の「この世はとても幾程の(命)」は省略している。恐らく省略した第一の理由は、「この世は幾程の(命)」は、次の行の「命の....末近し」と意味の上で重複していると考え、“He is near the end of his course” (Pound-Fenollosa)、“The end is near” (Waley) のように一つにまとめてしまったのであろう。しかし、「この世は幾程の(命)」は「この世での命は長くはない」、「命のつらさ末近し」は、「生きる苦しみもあとわずかである」と解するべきであろう。また、第二の理由は、「とても」が人間の意思や力では抗うことのできない運命の力を前面に出すことで、それまでの景清の思考と一転して、「この世は幾程の(命)」を厭世的気分に包みこむ働きがあることに気づかなかつたためであろう。

3. 試訳について

ここまで、「感情を表わす副詞」に焦点を当てて、能『景清』とその英訳の文体の違いを分析してきたが、「とても」のことに「さすがに」「とても」のいずれの場合も、英訳から除外されていることがわかった。また、その理由として、能原典に見られる二つの大きな日本語の特性が考えられた。つまり、論理的繋がりが言葉でしっかりと表現されていないという文化的特性と、その副詞の表わす意味が前後関係に大きく依存しているという言語的特性である。

この節では、能原典の意味と文体を伝えるために、ある程度この日本語のもつ文化的特性と言語的特性を英訳に残しつつ、しかもできるかぎり自然な英語でこの副詞を用いる登場人物の感情の再生を図るような翻訳を試みる。つまり、感情を表わす副詞のもつ暗示的な意味合いと観客の想像力を喚起する部分を残す。また、能『景清』の演劇的効果を十分に引き出すために、

Nida and Taber (1974:13-4) の翻訳理論に基づいて散文と韻文の区別をするだけでなく、七五調を基調とする韻文のリズムを可能なかぎり再生するように努める⁹⁾。

まず、「問答」の中の「とてものに」を含む従者の言葉をもう一度見てみよう。

従者 (問答)

これハ景清の息女にて渡り候が。今一度父御に御対面ありたき由仰せられ候ひて。
 これまで遙々御下向にて候。とてものに然るべきやうに仰せられ候ひて。景清
 に引き合はせ申されて賜はり候へ。

従者は、人丸のことを里人に話すとき、「これまで遙々御下向にて候」のあと全く論理的に繋がらない「とてものに」という副詞を突然用いて、それまでの思考を中断放棄し、それまでの思考から飛躍した結論に感情的直感的に達する。そのとき、「とてものに」の中には、次の言葉が従者の内面の声として凝縮されているはずである。

「このまま急ぎ戻っても、恐らく景清は会ってはくれまい。それよりも、この里人に頼んで景清の庵室まで一緒に行ってもらい、娘の人丸がとても会いたがっている様子を話してもらえば、景清は会ってくれるかもしれない。よし、少し唐突だとは思いますが、思いきって頼んでみよう。」

故に、「とてものに然るべきやうに仰せられ候ひて」の部分は、この内面の声の一部を用いて「唐突だとは思いますが、娘の人丸がとても会いたがっている様子を話していただく」のように言いかえることができるだろう。「とてものに」を「唐突だとは思いますが」に言いかえて、従者の気持ちを英訳すれば、論理の一貫性を保つことができ、かつ説明しすぎにならず観客の想像力を働かせる余地を残すことができるであろう。この「問答」といわれる詞章は散文で表現されているので英訳もそれに合わせる。

ATTENDANT (Mondoo)

She is Kagekiyo's daughter. She has come all the way to see her father.
It may sound like an unexpected decision, but I would be happy if you
 would kindly take us to Kagekiyo and tell him that his daughter is anxious
 to see him.

次に「さすがに」を含む詞章をもう一度見てみよう。

地謡 (段歌)

目こそ晴けれども。
 人の思はく一言の内に知るものを。
 山ハ松風。
 すは雪よ

見ぬ花の覚むる夢の惜しさよ。
さて又浦ハ荒磯に寄する波も聞ゆるハ。
夕汐もさすやらん。
さすがに我も平家なり。
物語始めて御慰みを申さん。

「夕汐もさすやらん」で、屋島での勇壯をきわめた合戦の様子を思い浮かべるのであるが、突然次の「さすがに我も平家なり」で、現在盲目の平家語りにすぎない現実認識を行なう。故に、「さすがに」は、「恍惚」から「悲しみ」への感情の変化を一瞬のうちに表現する重要な働きをする。英訳に際しては、この感情の飛躍を「さすがに」の中に凝縮させるために、「確かに自分は平家の勇猛な侍として屋島の合戦では目覚ましい働きをしたのだが」という内面の思いを表現してはどうだろうか。「段歌」はすべての詩行が12文字ではないが、リズムに乗って謡われる韻文の詞章なので、その律動を再生するように英訳してみる。

CHORUS (*Dan-uta*)

Although I am blind,
To hear a person speak a few words,
I can see what he intends to say.
The wind blows through the pine trees on the hill.
Look ! The snow is falling !
I can see invisible flowers in a dream,
But I am bitterly disappointed
To find them gone away when I wake up.
And on the shore, I can hear
The sound of the waves washing the rough rocks:
The evening tide is coming in.
Indeed I fought bravely in the shore battle,
But I am just a storyteller of the Heike now.
I will tell you about the Heike,
And it will amuse you.

最後に、「とても」を含む詞章を再び掲載する。

地謡 (歌)

昔忘れぬ物語。
衰へ果て、心さへ。

乱れけるぞや恥かしや。
 この世ハとても幾程の。
 命のつらさ末近し。
 はや立ち帰り亡き跡を。
 弔ひ給へ盲目の。
 暗き所の燈火
 悪しき道橋と頼むべし。

これは、景清が軍語りの勇壮な気分から、一転して厭世的気分への感情の変化を示す部分であるが、この感情の変化を導き出すのが、副詞「とても」である。

「とても」の中に、「どんなに生きようと頑張ってみても」という景清の思いが込められ、この表現は「運命の力の前では人間は無力である」ことを示し、なすがままに運命に身をゆだねようという諦念をそれだけ強く表現するのである。従って、「とてもこの世は幾程の(命)」の英訳に際しては、「たとえ自分で望んだとしても、この先長くは生きられないだろう」というように言いかえ、景清の胸中を明瞭に表現してはどうだろうか。この詞章はほとんどすべての詩行が12文字で、拍合というリズムに乗って謡われる韻文の詞章なので、その律動をできるかぎり再生するように英訳を考えてみよう。

CHORUS (Uta)

I have managed to tell what I remember.
 But now I am old and weak.
 My thoughts are tangled: I am ashamed.
After all, no matter how much I desire,
 I do not have very long to live in this world.
 This harsh world will not be tormenting me any more.
 The end is near. Go home soon and pray for me
 So that my soul can find the way to Paradise.
 Your prayer will be a light to guide this blind man,
 Moreover a bridge over a valley ahead.

4. 結びにかえて

「いっそ」「さすがに」「どうせ」といった個々に意味を説明することが非常に難しいけれども、ある文脈の中では日本人の深い感情を豊かに表現する副詞が、明治時代からの欧米文化の影響を受けることなく、およそ600年前の様式と言葉をほぼその当時のまま保ち続けている「能」の中で、一部形こそ違え、現代日本語と同じ論理と価値観で用いられていることは興味深い。

なぜならば、このことは、これらの副詞が正に純粋な日本人の文化の中で生まれ、600年の時空を超えて今なお同じ論理と価値観で用いられていることが本研究で明らかになったからである。

これらの副詞は、それまでの思考とは無関係に、論理的飛躍も顧みず、突然の感情の変化を表現するために用いられる。この発想は、原因を明瞭に説明せず、結果のみを強調しようとする日本人の思考様式を生み出している。次から次へと考えが頭の中を駆け巡るが、なぜそのように考えるのか理由を説明することはない。ただ思考の結果を述べるのみである。要するに、その思考の結果はそれまでの思考から飛躍した結論に感情的直観的に達するという印象を与えるが、聞いているほうもその論理的飛躍を前後関係から判断し、話し手の感情の変化を理解し、話し手の感情に共感を覚える。このようにして、思考よりも感情の交流が優先すると言える。この日本人独特の感情の交流の仕方は、聞き手の文脈の理解を前提としている点で、以心伝心または察しの文化と無縁ではない。

『景清』の英訳はこれらの副詞の用いられる文脈を的確に把握し、話し手の感情をうまく伝え、能『景清』の演劇的效果を十分に引き出す翻訳となっているのであろうか。答は否である。Pound-Fenollosa の翻訳も Waley の翻訳もともに、肝心の「とてものこと」「さすがに」「とても」を含む一文を省略してしまっている。その理由は恐らく、これらの副詞が、それまでの思考と論理的繋がりを欠いて用いられ、その意味は文脈の深い理解によるところが多いためであろう。このことから、英語では論理的一貫性がなによりも優先され、そのため直截的表現が好まれると考えてよいようである。

Pinnington (1988:63) が「日本の短歌を、原典で読むことも、原典とかけ離れた英訳に別の楽しみを見出すこともできない人は、原典に忠実でしかも英語として鑑賞に耐えうる翻訳というほとんど不可能に近いものを捜し続けるだろう」と述べているが、短歌に「能」を置き換えて、「日本の能は原典を読み、観劇することが望ましいが、そのできない人は、難しいことではあるが、原典に忠実でしかも英語として鑑賞に耐えうる翻訳に巡り会うことが必要である」と言えるであろう。

注

- 1) 板坂元 (1971) 『日本人の論理構造』講談社現代新書38頁参照。板坂は『日本人の論理構造』の中で、「いっそ」「さすがに」「どうせ」などの言葉を使用するときの日本人独特の論理や価値観を詳しく分析している。
- 2) 『景清』は四番目物(雑能)の人情物に属し、人間の生きる苦しみを極めて劇的に表現している。この能は単式現在能で舞を含まない劇的情緒的な能である。『景清』の作者が世阿弥であることに伊藤(1983:424)は懐疑的である。『景清』の中に、景清が娘の人丸に源氏の待三保の谷十郎との戦いぶりを話すくだりがあるが、この場面は『平家物語』巻第十一の「弓流」からの引用であると考えられている。『平家物語』の中での景清についての記述はこの「弓流」だけで、景清が盲目になった理由も、宮崎に流された理由も、娘人丸のことも出ていない。「弓流」の記事と勇猛な景清伝説から作者が景清像を作りだしたのであろう。このことについては、田代(1987、141-221)に詳しく述べられている。

- 3) 能『景清』原典として、観世左近著観世流大成版『景清』(1982)を使用。
- 4) 使用翻訳は、Ezra Pound と Earnest Fenollosa の共著となっている *The Classic Noh Theatre of Japan* (New York : New Directions Publishing Corporation, 1959) および Arthur Waley の *The Nō Plays of Japan* (Rutland, Vermont : Charles E. Tuttle Company, Inc., 1976) である。本論文では、Ezra Pound と Earnest Fenollosa を Pound-Fenollosa と略記した。
- 5) 盲人に与えられた官名で、検校、勾当、別当、座頭の四官十六階があった。景清は剃髪し法体をとっていたが、仏門には入らず麻の衣をまとい、平家語りの琵琶法師であった(田代1987:217-8)。
- 6) この解釈については、伊藤正義校注著新潮日本古典集成『謡曲集上』275頁参照。
- 7) 金井清光(1972)『能の研究』第2版 桜楓社528頁。
- 8) 同書530頁。
- 9) 能の謡は、コトバ(無リズムの散文による謡)、拍不合(リズムに乗らない散文または韻文による旋律部)、拍合(リズムに乗る韻文の旋律部)の3種類から構成されている。韻文は原則として七五調で、拍合では上の句7、下の句5の合計12文字を8拍のリズムに当てはめて謡う。

参考文献

- 板坂元(1971)『日本人の論理構造』(講談社現代新書)講談社。
- 伊藤正義(校注)(1983)「景清」(『新潮日本古典集成』謡曲集上267-79頁)新潮社。
- 梶原正昭、山下宏明(校注)(1993)『平家物語』(『新日本古典文学体系』45)岩波書店。
- 金井清光(1972)『能の研究』第2版 桜楓社。
- 観世左近(1982)『景清』(観世流大成版)検書店。
- 小山弘志他(校注・訳)(1975)「景清」(『日本古典文学全集』34 謡曲集二 260-73頁)小学館。
- 金春國雄(1980)『能への誘い—序破急と間のサイエンス』淡交社。
- 佐成謙太郎(1963)「景清」(『謡曲大観』第1巻 631-47頁)明治書院。
- 三省堂編集所(編)(1973)『広辞林』第5版。
- 田代慶一郎(1987)『謡曲を読む』(朝日選書)朝日新聞社。
- Nida, Eugene A. and Charles R. Taber. (1974). (First published in 1969). *The Theory and Practice of Translation*. Leiden, Netherlands: E. J. Brill.
- Nida, Eugene A., Charles R. Taber, and Noah S. Brannen. (1973). 沢登春仁、升川潔訳『翻訳—理論と実際』研究社。
- Pound, Ezra and Earnest Fenollosa. (1959). (First published in Dublin in 1916 by Cuala Press, as *Certain Noble Plays of Japan* with an introductory essay by W. B. Yeats. First published in the U.S.A. in 1917 by Alfred A. Knopf, Inc., as 'Noh' or *Accomplishment, a Study of the Classical Stage of Japan*). *The Classic Noh Theatre of Japan*. New York: New Directions Publishing Corporation.
- Pinnington, A. J. (1988). "Kinds of Ambiguity: Reflections on English Translations of Japanese Verse." *META* 33, 1, 50-63.
- 村松剛(1977)『察しあいの世界』プレジデント社。
- 横道万里雄、表章(校注)(1963)「景清」(『日本古典文学体系』41 謡曲集下 418-23頁)岩波書店。
- Waley, Arthur. (1976). (First published in 1921). *The Nō Plays of Japan*. Rutland, Vermont: Charles E. Tuttle Company, Inc.